

# 敦煌郊外

野口武久  
(詩人)

ない

音がない

匂いがない

動くものがない

砂漠をわたる風がない

水がない

緑がない

人がない

はてしなく続く不毛の地

地平線のまじわるところ

黄色い砂と空だけがある

ここはシルクロードの起点――

玄奘三蔵は六二九年

西をめざした

マルコ・ポーロは一二七四年

ここにたどり着いた

「君きみに勧すすむ更さらに尽つくせ一杯いっぱいの酒さけ

西にしのかた陽関ようかんを出いづれば故人こじん無なから

ん」

唐の詩人王維が別れにうたった地だ

砂漠のかなた灼熱が舞う

# 酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



詩 敦煌郊外

週刊誌よ、どこへいく

夏の公園二題

絵と文

「気持ち」と「ころ」

ほろ酔い詩歌紀行 — さけさけと

八月十五日のこと

アメリカで歌った啄木の歌

線虫に学ぶアンチエイジング

食事制限と長寿(寿命延長)遺伝子

野口武久…1

池井優…4

高橋和島…6

堂昌一…8

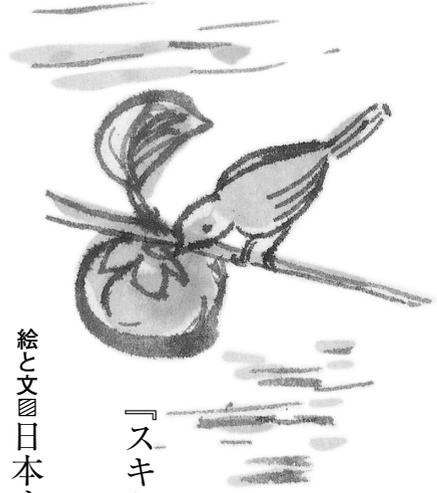
安森敏隆…9

日高昭二…11

内野潤子…13

宮地智子…15

杉本忠夫…17



絵と文 洋酒山ごぼう 中西美子…19

「無法松の一生」と岩下俊作 志村有弘…20

絵と文 日本語吹替 佐川毅彦…22

「思ハズシテ得ル」 志村栄守…23

〈美しい牧場〉のこと 桐原良光…25

『スキヤキ』の次は『スシ』だった 片岡義男…27

「十年日記」を書き始める 新田啓造…29

絵と文 日本オーストリア交流140周年の

公式行事に参加して さかもとふさ…31

夏の一夜 永岡慶之助…32

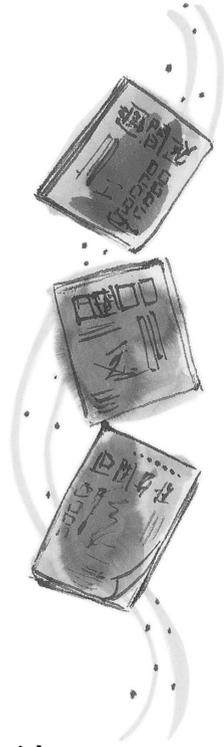
亀の恩返し 山本千明…34

健康に悪いといわれても、やめたくないこと 上杉正幸…36

小説・江戸神仏歳時記(19) — 新宿大久保・稲荷鬼王神社 郡 順史…38

表紙・グラビア…香川の洋館

# 週刊誌よ、どいへんく



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

「こころ」、二年、電車の車内で週刊誌を読む人を見かけることが少なくなつた。大手出版社の役員はこう嘆く。「最新号の雑誌を抱えて東京の地下鉄に乗り、同一車内に同じ雑誌を持った乗客がほかにいたら、その媒体の発行部数は三十万部、実売で二十万部はまず堅いと踏んでいた。が、残念ながら最近そうした光景はとんとお目にかからなくなつた」。

日本で週刊誌が創刊されたのは、大正時代に遡る。一九二二年、朝日新聞と毎日新聞が「週刊朝日」、「サンデー

毎日」の刊行に踏み切つたのである。しかし当時は二誌とも新聞社の副業に過ぎず、記事も新聞記者が片手間に書くいわゆる社内原稿で内容もさしたるものではなかつた。しかし戦後「週刊朝日」に社会部から転じた扇谷正造が編集に携わるようになって大きく変わった。東大仏文科の教授で洒落たエッセイストでもある辰野隆を起用した連載対談「忘れ得ぬことども」は毎回野村胡堂、谷崎潤一郎、大仏次郎、サトウハチローなど豪華なゲストを迎え、評判がよく、ホストに座談の名手で「人

生の達人」徳川夢声を起用するに及んで、夢声の「問答有用」を読むため「週刊朝日」を毎月買うという読者までできた。「週刊朝日」のもうひとつの目玉は吉川英治の連載小説「新平家物語」であつた。連載ものと同時に「ニューズ大衆誌」の面を打ち出し、太宰治と玉川上水に身を投げた愛人山崎富栄の日記を入手して全文掲載したり、芸能誌しか取り上げなかつた美空ひばりを丁寧な取材で紹介するなど記事の選択にも工夫を凝らした。

これに対し、ライバルの「サンデー

毎日」は、思い切ってサラリーマン作家源氏鶏太を起用。流行語ともなった「三等重役」がヒットした。やがて読売新聞が「週刊読売」、産経新聞が「週刊サンケイ」を発刊、ここに新聞社による週刊誌が出揃ったが、それに挑戦したのが「週刊新潮」だった。一九五六年二月、二年間の準備を経て「週刊新潮」が創刊されたのだ。「週刊朝日」は一時百万部を超え、出版社では大手だが、取材網を持たない新潮社ではニュースを追う週刊誌は無理かと考えられた。編集の責任者斎藤十一は脱「週刊朝日」の発想で出発した。アメリカの「ニューヨーカー」を参考に「映画」、「演劇」、「音楽・美術・本」、「スポーツ」、「ラジオ・テレビ」の五項目をタウンと名付けて編集した。新聞記者のアルバイト原稿に頼らず、各業界の現場のひとびとから毎回十数本のデータ原稿を集め、その内の三本をリライツとして掲載するようにした。データ原稿のギャラは一本六千円、サラリーマンの初任給が一万一千円の時代だからか

なりいいアルバイトで、いい情報が集まってきた。同時に文芸ものを長く出してきた強みを生かし、大御所谷崎潤一郎から剣豪作家五味康祐まで連載小説を充実し、「吉田茂回顧録」を掲載することによって従来の「週刊朝日」の読者層を奪っていった。さらにグループ取材とそれをまとめるアンカーの筆力によってデータ重視の読み応えのある記事が看板となっていった。

やがて生活にゆとりが生まれるようになると、サラリーマンが駅の売店で買って帰宅の車中で読む姿が見られるようになった。女性専用、野球だけ扱う週刊誌など専門化がすすむとともに、「週刊文春」、「週刊現代」、「週刊ポスト」など出版社系の総合週刊誌が相次いで登場した。高度成長で豊かになると週刊誌も編集の方針を変えた。「世の中は所詮イロ、カネ、出世だ」と政治家、スポーツ選手、芸能人のスキャンダルを追ったり、簡単な利殖法の紹介、上手に上司に「まをする方法など、かつてのじつくり読ませる手法から段々離

れ、ついに行きつく先はグラビアページに「ヘアヌード」を載せるまでになった。そうした姿勢は電車の網棚、駅のくず箱に週刊誌が捨てられる結果を生んだ。「家を持って帰らない」、「家のこともには見せられない」内容が並んだからだった。週刊誌自体の質の低下は、かつて熱心に週刊誌を読んでいた団塊の世代の定年退職、記事に対する訴訟も相次ぎ「書き得」は許されず、インターネット、ケイタイなどによる情報入手の変化と相まって、週刊誌は軒並み苦戦を強いられている。日本ABC協会の発表によると、二〇〇八年下半期の週刊誌は一位「週刊文春」五十二万部、二位「週刊新潮」四十五万部、三位「週刊ポスト」三十三万部、四位「週刊現代」二十四万部、以下八位に「週刊朝日」十七万部、「サンデー毎日」にいたっては十万部を大きく割り込み七万部に満たない。

今後週刊誌はどの方向を目指すのか。読売、サンケイのように撤退するののか。まさに岐路に立たされている。

# 夏の公園二題

## スズメバチ

わたしが、朝夕、散歩を楽しむ公園には三階建ての展望台がある。鉄筋コンクリート製のしっかりしたもので、わが田舎町の中心部を見下ろすことができるだけでなく、晴れた日には古くから信仰の山として知られている木曾の御嶽山（標高三〇六七メートル）の眺望を楽しむこともできる。

今年の六月末、この展望台の階段入り口にロープが張り渡され、登れなく



なった。スズメバチに刺される怖れがあるので巣を取り除くまで一時閉鎖する、と記された板きれが立てられていた。

散歩仲間によると、スズメバチの巣は展望台最上階の天井にあり、大事には至らなかつたものの、すでに被害者が一人出ているという話だった。

一週間ほど経つと板きれの警告もロープも見られなくなつた。市役所の依頼を受けた業者が蜂の巣を取り除いたのだ。

## 高橋和島

(作家・郷土史家)

ひと安心していると、四、五日後にまたロープが張り渡され、スズメバチ注意の板きれが立てられた。

スズメバチが展望台の天井に再度巣を作り始めたのだそうだ。モノ知りの散歩仲間によると、女王蜂を始末しない限り、幾度でも同じ場所に巣を作ることがあるので、業者はしばらく様子見をするのではないかとか。

その後、八月に入っても、立ち入り禁止のロープも板きれも撤去されないままに放置された。

ラジオ体操の常連組のやりとりを聞くと、八月いっぱい蜂の巣が取り除かれることはあるまいという。理由は、誰かの知恵で展望台を若者たちの溜まり場にさせないため。あえて除去作業を遅らせているのだから。そう言われてみると、例年なら、公園の芝生広場で催される盆踊り大会前後の展望台周囲にはビールの空き缶、スルメやピーナツの袋、花火などが散乱しているのだが、今夏は実にきれいなものだった。

この穿った見方の真偽を確かめはしなかったが、スズメバチの巣が撤去されたのは八月末だった。

### ホームレス

この公園には草野球や少年サッカーに使われるグラウンドが隣接しているので、五、六十台は収容できる駐車場がある。

三十キロほど離れたK市ナンバーの白い軽乗用車が駐車するようになったのは七月初めからだった。

駐車場の外周に植えられた櫻の中で

もひときわ枝を茂らせた木の下に駐められた車には、頭髮が薄くなった男性の姿があった。

朝夕の散歩の際、遠くから見かけるだけなので確かなことは言えないが、歳は六十前後というところだろうか。

公園にはトイレも飲み水もあり、車で四、五分の距離にコンビニ、スーパー、コインランドリー、さらに十分余も走らせればスーパー銭湯もある。

しかも、車の中の寝泊まりが可能な夏だ。一週間ほど経っても、白い軽は櫻の下に駐まったままだった。

どんな事情があつてのことか見当はつかなかったが、彼はK市に住めなくなつて、この田舎町の公園の駐車場にやつてきたものと思われた。

散歩仲間から様々な情報が寄せられるようになった。

雨が降っているのに、車のドアを開け、足を突き出して座席に横になり寝ているのを見た。運転席で新聞を読みながらパンをかじっていた。車から出て屈伸運動をしていたが、痩せて顔色

はひどく悪かった。シートを倒して文庫本を読んでいる様子だったので、近くまで寄ってみると、カーラジオから歌謡曲が流れていた……等々。

彼がK市を出てきた理由をいろいろ推し量る散歩仲間もいた。

失業、サラ金への借金、夫婦喧嘩、不知の病……。

七月下旬のある朝、いつもより三分ほど遅れて公園に向かおうとしたわたしに、犬の散歩を済ませてきた隣人が、顔を強ばらせて教えてくれた。

公園の駐車場にパトカーが駐まつており、例の白い軽の横に数人の警官が立っていた。どうやら軽乗用車の住人が死んでいたらしい……と。

駐車場に向かうと、確かにパトカーと警官の姿があつたが、軽の中の様子はよく判らなかつた。

この日の夕方には、白い軽自動車が消えていた。新聞やテレビに取り上げられることはなかつたので、その後も真相は不明のままである。

堂  
昌  
一



夏の暑さから ようよう秋風が嬉しい候になった。

和服も単から 袷に衣替えをする。街中で、パーティー場で、和服姿をチラチラと見かけると、やっぱり日本の、きものの良さが感じられる。

特に「中年の後姿」が良いものだ。季節感をこれほど表現する衣類は、他国にはないだろう。

材質に、色柄に、そして下着から小物まで、すべて、四季感を出している。何と素晴らしいことだろうと思う。

日本人ならもつともつと和服を愛して欲しいものだ。

# 「気持ち」と「ころろ」

## 高校生の気持ち

高校生から五七五七七の短歌を募集する「SEITO百人一首」はじめ、数年になるが、次のような歌にであって「ああ」と思ったことである。

・二秒間逆さになって見えたもの青空  
踏んでた私のサンダル（雨宮杏奈  
学習院女子高等科 二年）

この歌、とてもすかっとして良い歌なんだけれども、なんとなく分かりませんが、何をよんだのか具体的になんと解りにくいですね。二秒間逆さになっている。そして、青空をサンダルが踏んでいると歌っているから、てっきり



私はサンダルを履いたままで逆立ちをしていると解釈しました。ところが、入選者には二〇〇字のコメントを書いてもらっていて、それを読んでまことによく分かりました。これには、こんなコメントが附されています。  
実は逆立ちではなく、

「私にとって夏が四季の中で一番過ごすのが楽しいな時間です。暑いけど天気は毎日良いし、夏ならではの冷たい食物を口にできたり涼しい格好ができるからです。夏休みにはもちろん街で買い物などして過ごしますが、たまには家のそばの公園でブランコに乗

## 安 森 敏 隆

（同志社女子大学教授・ポトナム代表）

りながら友達とアイスを食べたり喋ったりして一日過ごすのも好きです。ブランコをこいでいると風が自分でつくりだせるので涼しく気持ちよくなります！腕を伸ばし背中を反らしごとと天地がさかさ見えて、自分の靴が空の方に向かってのびている瞬間があります。そんな一瞬をふっと思い出してこの短歌を作りました。」ということ、ブランコを漕いでいたのだそうです。うまく風につけて、自分の気持ちを二秒間サンダルで青空を踏んだと言っている。しかし、今の高校生は歌もうまいが、「短い文章」を書くのが、とても

うまいと思います。風をつくりだすとか、青空をサンダルで踏んでいるとかを即座に書けるのは、携帯電話の強さかな、と思います。

「自由」とか「雪」

また、具体的な「気持ち」を表現した歌には

・携帯を置いて出掛けるそれだけで自由を手にした気持ちになれる（杉崎素子 加藤学園暁秀高校 二年）

というのがあります。今回も、現代の「歌枕」ともいえる「携帯電話」（ケータイ）を素材にした歌が多く投稿されてきました。二十一世紀の文化の中にとけこみ、現代のコミュニケーションの手段としてなくてはならないモノにまで普及した「携帯電話」も、この歌のように携帯電話を手放し「置いて出掛ける」時にこそ「自由」になった、という逆説的な（こころ）の自由が詠われたところに、新しい視点が見られました。携帯を持っていてと非常に便利で、いつでも離さず持っているといけないのかもしれない。だけど、

置いて出かけたときだけ「自由を手」にすることができ。携帯はお互いの自由をうまく合わせ持っている現代の最大の利器だと思っていたのが、逆にそれに縛られていて、置いて出かけたときだけ自由を手にした気持ちになれるのかもしれない。私の息子も寝るときでも枕元にケータイを置いて四六時中、ケータイ電話を身につけています。

ですが、瞬間だけが置いたときだけ自由が手に出来るというように、だいぶその便利なものに、逆に束縛され始めています。つまり、ケータイ電話がないときに自由を手にした気持ちになれるという「気持ち」も、とても大事な瞬間を掴んでいる。

・決意した気持ちはすぐに雪みたい  
溶けてあたしはまた水になる

（岡田和美 ノートルダム女学院高校 三年）

朝になって、今日はあれをしよう、これをしようと決意するけれども「気持ち」は雪みたいなもので、溶けて水になってしまふ。朝、あれほど決意し

た気持ちは、「雪」のようにはかなく、「水」のように透明なものかもしれない。柔軟と言えば言えますが、「気持ち」というものは、このようによく動くものだと思います。簡単に言えば「雪だ！」と言っているかと思えば、「雪でもない、水だ！」と言っている。決意した気持ちをずっと守るのも大事だけれども、心とか気持ちとかは常に変わっており、その瞬間をまことにうまく具体的に、この歌はとらえて詠んでいます。見えるようにとはこのことで、横光利一がよく言っていたのですが、「見えない心を目の前に見えるように風景として描く」と言うことでしようね。「決意した気持ち」はすぐに雪みたいに溶けて「水になる」と具体化しています。「気持ち」を「雪」と「水」にして非常にうまく詠みきっています。そして、「気持ち」から「こ、ろ」に向かって行くと、もう少し昇華していきます。「気持ち」をもう少し掴まえると「こ、ろ」の歌になつてきます。

# ほろ酔い詩歌紀行

## さけさけと



日高昭二

(神奈川県大学教授)

今日も、明日も、酒を飲まずにはいられない人にとって、またとない応援歌がある。江戸時代の禅僧良寛さんの、たとえば、次のような歌。

さけさけと花にあるじをまかせら  
れ今日もさけさけ明日もさけさけ

これには詞書があつて、「岩室の酒禅師の許にまかりけるに、酒ばかりすすめらるるを」とある。注釈書によれば、「岩室の酒禅師」については、未詳であるとのことだが、『平家物語』の巻九にみえる忠度辞世の歌「行き暮れて木の下かげを宿とせば花やこよひのあるじならまし」をふまえた歌であること

は記されている。

物語では「花があるじ」であるが、良寛の歌では、自分が居なければ当然花がこの主人の相手をするところ、今日は花に主人の相手を任されたと読み替えられている。つまり、そのように花にかわつてこの家の主人の酒の相手を任せられ、今日も明日も酒浸りだ。花よ今日も明日も咲け咲け、ということになる。

「花」と「あるじ」の関係でいえば、良寛の留守に訪ねてきた真心尼が詠んだ歌を思い起こす。「来てみれば人こそ見えぬ庵守りて匂ふはちすの花のたふとさ」という一首である。それに対する良寛の返歌がある。

みあへするものこそなけれ小瓶なる蓮の花を見つしこのばせ

せっかくお出で下さつたのに、あるじは留守。おもてなしをするものはないが、ただ小瓶に生けた蓮の花を見て偲んでください、というわけである。真心尼の歌のむすび「花のたふとさ」には、むしろん尊いあるじとしての良寛が重ねられているのだが、その返しに良寛はもういちど「蓮の花」を、いわばおもてなしの心として伝えていたのである。

このもてなしの花が、「あるじ」に替つて「酒」になるところに、酒好き良寛

の面目があるだろう。しかも「さけ」という言葉に「咲け」と「酒」が掛けられて、いつそう興赴に富んだ一首になつてゐる。さらに、その「さけ」のくりかえしが、冒頭から末尾へと何とも心地よいリズムさえ生みだしている。

この「さけ」をたびたび口ずさんでいるうちに、こちらの酔い心地もいよいよまさつてくるというものである。ひとり手酌で飲むときなど、この歌を口に出して飲めば、どんな孤独にも花が咲く。まさしく応援歌たるゆえんである。

今日も、明日も、「さけさけ」だという歌でもわかるように、良寛の酒好きは、よく知られてもいよう。それを示す酒の歌もまた多い。

大御酒を三杯五杯たべ酔ひぬ酔ひてののちは待たでつぎける

あすよりの後のよすがはいさ知らず今日のひと日は酔ひにけらしも

こうした良寛の行状を伝えるものには手紙がある。それには、人からさまざまな贈り物をいただき、その御礼をしたためた手紙があるのだが、豆、野菜、のり、こんぶから、そうめん、りんご、ようかんなどに至るまで、品物の名が具体的に記されているなかで、たびたび酒も贈られていることがよくわかる。

ときに風邪をひいていたことや、二日酔いであつたことなどを伝える文面もある。手紙は禅師の生活を知るうえで、またとない記録のひとつである。詳細で、しかも心の息づかいをも感じるこゝとができるからだ。

その一方、他人の書いた記録の類のなかにも、酒にまつわる逸話が記されている。たとえば、良寛の庇護者として知られる越後の豪家の解良栄重（けら・よししげ）という人のそれである。この人は、小さい頃に家に遊びにきた良寛の話を聞いたことがあり、また、良寛の庵を訪ねて親しんだともいわれている人であるが、良寛没後その行状を記録した『良寛禅師奇話』を残した

人でもある。

現在、この書は、東郷豊治編『良寛全集』下巻（東京創元社、昭和三十四年）に収録されているので読むことができるのだが、そのなかに次のような一節がある。

師常ニ酒ヲ好ム。シカリト云ドモ、量ヲ超テ酔狂ニ至ルヲ見ズ。又、田夫・野翁ヲ云ハズ、銭ヲ出シ合テ酒ヲ買吞事ヲ好ム。汝一盃、吾一盃、其盃ノ数多少ナカラム。

これで見ると、良寛をただの酒飲みとすることは、どうやら慎まねばならないようだ。量を超えて酔っぱらうこともなく、また「田夫・野翁」など相手を選ぶこともなく、銭を出し合つて酒を買つて飲み、しかも「盃ノ数多少ナカラム」つまり不公平にならないように気遣つていたというのである。しかし、そのことと「今日もさけさけ明日もさけさけ」とは矛盾しまい。

# 八月十五日のこと



## 内野潤子

(歌人・エッセイスト)

昭和二十年八月十五日、激しい戦争が終わった日、私は十七歳であった。

其の日は重大放送があるというので、父が学校工場に通っていた私に「休みなさい」と言って家に居たのだった。

多分妹も家に居たと思う。当時母と幼い妹達は母方の祖母と一緒に母の姉が旅館を営んでいた茨城県潮来町に疎開していたし、兄は出征して戦地に、弟は学童疎開で山形の上の山にいて、家に残っていたのは父方の祖母と父と、

私と妹の四人だった。

若いというのは何という救いだったろうか、そんな暮らして毎晩の空襲に堪えながら、ひまがあると妹と二人で二部合唱などしてすごしていたのである。

「戦争が終わったよ」と放送の後父がぼつりと言った。「よかった。死ななかつた」。体中の細胞がいちどきに緩んでいくようだった。

「じゃあ居間の電気の黒いカバーとっ

てもいいよね」と先ずそんなことを言っていたと思う。

縛られていた固い縄がほどけたというのが十七歳の実感であった。しかし父にしては、これから、どうなるのかということが先ずあったのだろう。少しも明るい表情でなく書齋に入っていた。

その夜、近くに住む父と同じく物書きの友人が尋ねてきて、アメリカ軍が進駐してくるだろうから若い女の子は東京を離れていた方がいいと言いに來てくれた。

父は私と妹を連れて、母の居る潮来に行くことになった。私は読みかけの本など持って本当に慌しく妹と父と三人で母の元へ辿りついたのである。父は二、三日いた丈で帰京した。

その家は本当に狭く、すぐ前を小さな川があり、家の前の空地には、祖母が植えたらしいいんげの繁みがあった。

食べ物がお粥にして祖母が誰かに貰ったカレー粉を入れて、カレーの匂いのす

る粥を作ってくれた。

何故か町に胡瓜だけは売っていて、きりぎりすの如く、毎日胡瓜をかじって空腹をまぎらわしていた。

夕方母と妹達と広い利根川のほとりを散歩したりした。ある時「泳ぎたいなあ」と私が言うとう母は「いいわよ。そのまま泳いでごらん」と言ってくれた。洋服のまま川に入ってみたが、体中に服がまとわりついてとても泳げたものではない。びしょぬれの私と妹は、そのまま家に帰った。母は厳しい面もあったがそういうことにはいつも背中を押してくれる人だった。又ある日旅館の叔母が食事の乏しい私達を哀れがって、牛車を頼みおひつに一ぱいの白米の塩むすびを入れて鹿島浦の海につれていってくれた。町の中を牛車はゆつくりと進みようやく浜についた。白米の塩むすびはいくつ食べても満腹を覚えぬおいしさであった。海は荒れていて波が高く、打ち寄せては浜の砂を削っていった。

幾日位潮来に滞在したのかはつきり

した記憶がない。東京から在京の叔父の一人が父の手紙や私たちへの品物などもつけてきてくれた。その頃戦時中勤労動員で知り合った大学生が父の所に尋ねてきたと書いてあった。

東京に帰りた、早く帰りた、その時切実に思った。当時の列車は本常に常に満員で、時間も不規則で一度は乗れずに帰ったりした。帰りの列車にやつと乗れた日のことは忘れられない。それは敗戦列車であった。

目の前に若い韓国の夫婦が居て、手さげから茹で卵を次から次に出して食べていた。

すぐ傍に従卒をつれた軍人が立っていて、彼の軍帽の記章に白い布が巻かれていた。

家に帰りつくくと床の間に大きな南瓜がいくつかがしてあって、もう庭に蟋蟀こおせの音がする頃になっていた。

戦後の世の中は一変した。九月に入学式をした学校の生活の楽しさ開放感、学生の私はアルバイトで百万円の宝くじを売ったり、戦災孤児救済運動に参

加して、駅に立ったり、友人たちとの交流の、自由で快かったこと、これは今思うと全く興謝野晶子の次の歌のようであった。

天人てんじんの一瞬ひとときの間なるべし忘れはててんとし頃のこと

そして今年私は六十四回目の八月十五日を迎えたのである。十三日に旧盆の麻幹を夫のために門を開いて娘と焚いた。旧盆になると例年のごとく、息子の一家の四人と、娘の一家が合流して賑やかな五日間を過ごす。

八月十五日の朝、娘婿に「お母さん今日は終戦記念日ですね」と言われて、はつとしたのである。

忘れることのないあの日のこと、決して忘れてはいけないうあの頃のこと。

飽食の今では考えられなかった様な、辛い空腹感、空襲に亡くなった先生や、親友の母上のことなど次々思い浮かんで来た。

何より、空から爆弾が落ちてこない今の幸せ、家族の青年が徴兵でさらわれることのない今の幸せを思った。